

## 報告者公募型テーマセッション・企画趣旨

人口変動と家族変動：その関係とメカニズムの検討

白波瀬佐和子（東京大学）

日本は、いま最も高齢化した社会である。2016年9月15日現在の人口推計（総理府統計局）によると、65歳以上人口割合は27.3%であり、1960年の同割合が5.7%であったことを考えると、戦後、人口構造がいかに急速に変化したかが想像できる。例えば、1950年の合計特殊出生率3.65から5年後には2.37と1ポイント以上の急激な低下となり、1960年には2.00へと、高度経済成長期の突入と共に日本は急激な出生力転換が起こった。その後も合計特殊出生率は低下を続け、1970年代半ばには、人口置換水準2.07に達しない少子化時代へと突入していく。このような人口変動の背景には、世帯構造の変化、世帯の中の家族関係の変化、さらには世帯を構成する個人のライフコースの変化が関連している。本セッションでは、人口変動と家族の変化を明示的に関連づけて現代家族を検討する。

具体的なテーマとして、例えば、少子化の観点から、結婚に着目した配偶者選択、夫婦間の職業や学歴の組み合わせパターン、出産時期や子ども数を規定する諸要因の解明、出産時期と結婚時期の逆転現象にみる子育てのあり方、などがある。家族内の関係については、性別役割分業を現役から引退期へとよりダイナミックな枠組みから検討したり、夫婦のみならず子どもや親をも考慮して再検討することも可能である。高齢期にいたっては、多世代同居が減って、一人暮らし、夫婦のみ世帯が増える中、介護の実態や経済的な問題、あるいは別居する子どもとの関係もまた、人口と家族をリンクさせる上で重要なテーマである。

以上のようなテーマを検討する際にはさまざまなアプローチがあるが、本セッションでは、大規模調査データの計量的分析手法を用いた研究報告を優先する。これまでの家族社会学において見過ごされてきた視点を積極的に提示する研究を歓迎する。